

1

尚釀会会報

第12号



《生命先端工学専攻 C3 棟（サントリー記念館）左と生物工学棟正面玄関》

大阪大学工学部
醸造・醸酵・応用生物工学科同窓会
尚釀会
平成21年9月

同窓会開催のご案内

開催日 平成20年11月13日(金)
場所 メルパルク大阪
大阪市淀川区宮原4-2-1 06-6350-2111
新大阪駅より徒歩5分
<http://www.mielparque.jp/osk/osk01.html>

○16:00 総会 5階 ル・マノワール
○16:30 講演会
　　片倉健男 昭和48年卒 「医療機器開発30年」
　　更家悠介 昭和49年卒 「生物多様性とビジネス」
　　谷川原瑞恵 平成19年卒 「K A I S T 報告」
○18:00 懇親会 5階 コムナーレ 会費10000円

出欠を同封の用紙にて Fax、郵送または、E-mail でお知らせください。

昨年4月より同窓会幹事長を拝命して以来、既に1年半近くになろうとしています。その間、折に触れ、年齢や職業をはじめ、その他の色々な状況も違う同窓の皆様が、どなたも参加をしたいと思うような同窓会の運営とはどのようなものかという言わば同窓会の永遠のテーマについて考えてまいりました。しかし、浅学の身には、なかなか良いアイデアは浮かびません。そのようなことを考えている中、5月に開催された尚釀会東京支部の同窓会に出席をさせて頂きましたが、なんと、本年3月に大学院前期課程を卒業したばかりの同窓生（女性）から、83才のシニアーな先輩同窓生まで、実に卒業年に60年の差がある同窓生の方々が参加をしておられることを知って大変驚きました。東京支部が大変活発な同窓会支部会を開催して頂いていることに敬服するとともに、同窓会のパワーを改めて認識した次第です。本部同窓会もさらにパワーアップして楽しい同窓会運営に努力していきたいと思っています。

尚釀会幹事長 原島 俊（昭和47年卒）

☆ 目次

Graduate Students Symposium in Biotechnology に参加して……和田直樹

- ・ 2009バイオテクノロジーセミナー東京報告
 - ・ 女性研究者のキャリアデザイン
 - ・ ～応生 Archive：教室の懐かしい物品を紹介します～
 - ・ ～ 酿酵野球大会も第30回を迎えました ～
 - ・ 同窓会通信

- Prof. Tatsuji Seki Presented with The Honorary Doctoral Degree

in Science (Biotechnology) from Mahidol University. . . . Watanalai Panbangred

- ・お酢の力に魅せられて ミツカン阪大会
 - ・平成20年度同窓会会計報告
 - ・同窓会会則
 - ・会員動向
 - ・教室の構成

巻頭言 一 「低炭素社会」へ向けて 一

大阪府環境農林水産総合研究所 吉田敏臣 (昭和 38 年卒)



今、温暖化対策は国際社会における最重要課題の一つであり、各国は温室効果ガス削減を目指して経済、社会全体を作りかえようとしている。目標は地球温暖化の大きな要因とされる CO₂ 発生をできる限り抑制した環境にやさしい「低炭素社会」である。政府は、環境、エネルギー、経済、産業、交通、都市、国際政治など幅広い分野の研究者 60 人で構成する「2050 日本低炭素社会」シナリオチームを編成し、「低炭素社会」実現の方策を検討させた (http://2050.nies.go.jp/20070215press/2050_LCS_Scenario_Japanese_080715.pdf)。2050 年時点の日本社会を想定するにあたって、A(活発な回転の速い技術志向の社会) と B(ゆったりでややスローな自然志向の社会) の 2 つのシナリオを設定した。研究結果によると、いずれのシナリオでも、2050 年に想定されるサービス需要を満足させながら、CO₂ ガスを 1990 年比で 70% 削減する技術的なポテンシャルが存在することを明らかにした。そして今後見込まれる産業構造転換や国土インフラ整備に向けて政府が強いリーダーシップを発揮して総合施策を確立し、強力な普及・促進策を実施することが必要であるといっている。

低炭素社会を実現するには、技術的な議論に加えて、社会・経済体系のみならず人々の価値観の転換さえ考える必要がある。20 世紀の量産型工業社会は物質主義者(materialist)的なモティベーションによって支えられてきた。将来の低炭素社会ではこれまでのモティベーションの体系から脱却することになる。すなわち価値観の転換である。新しい価値観はいかなるものであろうか。World Values Survey (<http://www.worldvaluessurvey.org/>) が手がかりとなる。ここで価値観を分析する基本的な軸として、「(A)Traditional↔Secular(世俗的)-rational」と「(B)Survival↔Self-expression」という 2 つの軸が設定されている。ここで、「生き残り」志向が強い人をマテリアリスト(物質主義者)と呼び、「自己表現」志向が強い人をポスト・マテリアリスト(脱・物質主義者)と呼んでいる。調査結果では、世界的に見るといわゆる先進国でポスト工業社会化が進む段階で、ポスト・マテリアリストが目立って増えはじめる。自己表現志向は 1 人当たりの GDP と弱い正相関があるようだが、日本は GDP が高いにも拘わらず、自己表現志向の数値が著しく低い。戦後日本では、キャッチ・アップ型工業化を目標にして、日本のシステムをつくりあげた。その中で集団主義と同調志向が強化された意識が支配する中で栄えてきた。しかし、キャッチ・アップが達成された後、日本のシステムを解体して新たなパラダイムを持ってくる(あるいは修正する)ことが必要である。それは何であろうか。欧米諸国のように、自動車産業などを中核とする工業経済から IT などハイ・テック産業を中核とするクリエイティブ経済を目指すのであろうか。あるいは独自の価値観にもとづいて新しい経済を目指すのであろうか。世界でそれぞれの国はそれぞれの歴史と文化を経験しており、現在の世界は多様な社会システムをもつ国を包含している。いずれの国も世界と断絶して存在することは事実上不可能である。21 世紀の日本は、多様な社会のインタラクションの渦中で、自分らの判断で最適なパラダイムの選択を行う覚悟が必要であろう。

教室の最近の動向

生命先端工学専攻

生物工学コース長 大竹久夫

(昭和 53 年 D 卒)

平成 20 年度は、当教室にとり比較的穏やかな 1 年でした。教室全体が関係する大きな動きはありませんでしたが、情報科学研究科の新棟が歯学部病院の南東に完成し、清水研と四方研がそちらに移動しました。細胞工学領域を担当された小林昭雄教授のご退職など、人事異動につきましては後ほどご報告致します。平成 16 年 6 月に改定された高齢者雇用安定法にしたがい、大阪大学も平成 24 年度末までには定年年齢が 65 歳にまで引き上げられます。定年後に再雇用するよりも人件費は掛かりませんが、定年延長による教員人事の停滞が懸念されるところです。

さて、平成 21 年 7 月現在、生命先端工学専攻生物工学講座には、教授 6 名、准教授 5 名、助教 6 名の教員が在籍しています。加えて、物質生命工学講座の極限生命工学領域に 3 名、生物工学国際交流センターに 4 名、情報科学研究科バイオ情報工学専攻に 6 名および産業科学研究所高次細胞機能研究部門に 4 名の先生方が在籍され、学部および大学院の教育にご協力を頂いております。この他、生物工学講座ならびに関連講座に 10 名の特任教員、15 名の特任研究員、2 名の技術職員、3 名の事務職員、6 名の技術補佐員と 13 名の事務補佐員が在籍しています。一方、学生数は英語コース所属の大学院生も含めますと、博士後期課程に 47 名、博士前期課程に 137 名、学部 4 年生に 75 名が在籍しています。

人事異動につきましては、平成 20 年 10 月 1 日に生物工学講座の松永幸大講師（細胞動態学）が准教授に昇任されました。生物工学国際交流センターでは、藤山和仁准教授が平成 21 年 2 月 1 日に教授に昇任されました。前にも述べましたように、生物工学講座細胞工学領域の小林昭雄教授が平成 21 年 3 月末に定年退職されました。小林先生は、平成 21 年 4 月から大阪大学大学院工学研究科のサステナビリティ・サイエンス研究機構の特任教員、またサステナビリティ・サイエンスデザイン・オンサイトセンターの招聘教授として現在もご活躍中です。平成 21 年 4 月 1 日には、大阪大学大学院基礎工学研究科物質創成専攻の紀ノ岡正博准教授が生物工学講座の教授として着任され、生物プロセスシステム工学領域を担当されています。また、平成 21 年 6 月 1 日には愛知県岡崎市の基礎生物学研究所から、渡邊肇准教授が生物工学講座の教授（進化生命システム学領域）として着任されました。

この 1 年は米国でのサブプライムローン破綻の影響を受けて、学生さんの就職状況が著しく悪化しました。多くの学生さんが、停滞した経済のもとで厳しい就職戦線に晒され、大変苦労をしております。会員の皆様におかれましては、ぜひ求人情報のご提供や就職のアドバイスなど、後輩達へのご支援を賜りたくお願いを申し上げます。

大学卒業後、テルモという医療機器・医薬品の製造販売を業とする会社に入社し、一貫して医療機器の研究開発を担当してきた。入社当時創業 50 年目の若い企業であった。入社以後医療機器を使用する医療技術の発展はめざましく、その環境の中で多くの医療機器開発を経験してきた。今回、同窓の皆様へ報告の機会をいただいたので、医療機器の開発経験を中心に現在の医療技術について報告させていただく。

医療機器は、体温計、血圧計などの家庭で使用されるもの、X 線撮影装置、MRI 装置などの病院で診断に使用される据え付けのもの、さらには注射器・人工臓器などの治療に使用されるものなど、非常に数多くのものがある。またおしゃれのために使用されていたカラーコンタクトレンズも最近医療機器として指定されている。このような幅広い医療機器であるが、テルモ入社以来、生体組織の機能代行を目的とする人工臓器の開発を中心に行ってきた。まずは、主として血液を体の外に取り出して行う血液浄化に用いられる透析器の開発から始めて、次いで体内に埋め込む人工血管、人工皮膚といった埋め込み型の人工臓器、さらには生きた細胞を用いた再生医療に取り組んできた。このように治療に使用される医療機器は、その時代における医療現場の要求、さらには社会環境により、めざましく進歩すると同時に、非常に多種多様な製品が生まれてきている。このような多くの製品の開発により、それぞれの病態に合わせた多くの治療の選択が可能となっている。

具体的な医療技術の進歩については、特に心臓の心筋へ栄養補給を行う冠状動脈の閉塞にあたっての治療及びその結果機能不全となった心臓の治療について概略をまとめた。（添付図）高齢化及び食生活の欧米化に伴い、心臓、血管といった循環器系の病気が増え、結果として、心筋梗塞、脳梗塞、脳出血といった重篤な病気にかかる患者が増えてきている。特に重篤な死につながる疾病として、心臓に栄養を補給する冠状動脈の動脈硬化による閉塞を起因とする狭心症があげられる。以前は、閉塞した冠状動脈の閉塞部位の末梢部位に大動脈から患者自身の血管によりバイパスを設けるバイパス手術が実施されていたが、現在は、まずそのつまりかけた血管を風船で膨らませて再度血液の流れを良くするバルーン治療に始まり、そのつまりかけた部位が再び詰まることを防止する目的でステントといった金属で出来た金網で補強する治療が行われる。さらにそのステントの再度の狭窄が起こるまでの期間を長くするために薬剤を複合化した薬剤徐放化ステントが使用されている。このように、従来はバイパス手術のために開胸していた治療が、大腿部の一部を切開するだけのプラスチック製のチューブ（カテーテル）を用いた低侵襲の治療へと変わってきている。また、このような治療を行っても心臓機能は徐々に衰えることもあるし、一方では種々の理由により心筋の機能不全が生じて心臓機能全般が低下する場合もある。このような心臓の機能の低下した患者に対する治療としての心臓移植、補助人工心臓、さらには患者自身の細胞を使用した再生医療についてもふれたい。

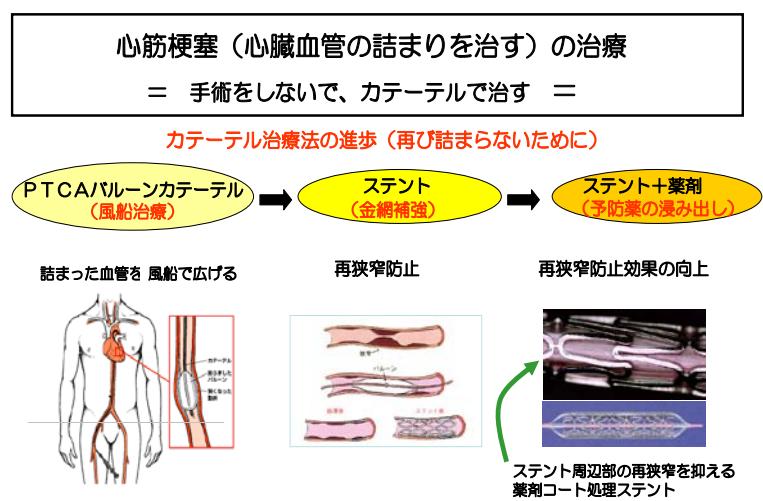


図. 冠動脈狭窄の医療機器による治療

「生物多様性とビジネス」

サラヤ株式会社 社長 更家悠介（昭和49年卒）

当社は、私の父親である更家章太が、1952年に創業しました。私の家は、代々三重県の熊野で、山林業に従事していました。熊野は温暖多雨で、杉や檜の栽培に最適で、植林育成され伐採された木々は、いかだに組まれて、北山川から熊野川、そして新宮の川原の木材市で取引がされていました。

第二次世界大戦が終結し、父親は、田舎から出でいろいろ事業を始めましたが、結局最終的に現在のサラヤ株式会社の前身である、三恵菴糧を創業して、健康食品を販売していたのですが、あまり売れなかつたようです。そんな中で鐘紡の産業医の石川先生から、手指の消毒と洗浄ができる石鹼液ができれば買ってやるといわれ、手洗い商品を開発したのが、現在の仕事の基礎になりました。その主要原料は、ココ椰子やパーム椰子の植物油脂でした。仕事は、その後次々とお客様がつき、発展をしていきましたが、熊野川の清流の清冽さを創業の原点にして、環境には常に気をつかってきました。

さて私は、大阪大学では、菅先生の前の教授の市川先生の教室に入れていただきました。教室では、活性汚泥や散水濾床など、生物をつかつた廃水処理を研究していましたが、私の4年生の時代には、藻をつかつた生物処理を研究させていただきました。小川先生は研究室が別でしたが、スピルリナの培養を研究しておられました。その後は、アメリカのバークレーの大学院に進み、衛生工学科の修士課程に進みました。

その後の会社や社会での経験は、講演でお話しするとして、2005年の夏から当社が参画している、主要原料のパーム油の生産地の生物多様性についてお話をいたします。オランウータンやボルネオ象、また多くの生物が棲息するボルネオの森と、パーム油の生産をどのように考え、今後対応していくべきでしょうか？ 二酸化炭素の削減から低炭素社会の実現、そして生物多様性の確保はいかに実現できるのか、聴衆の皆さんと考えたいと思います。



キティちゃんもボルネオ応援



ボルネオゾウと森を守るプロジェクト

8th Osaka University-KAIST Graduate Students Symposium in Biotechnology に参加して

大阪大学工学研究科生命先端工学専攻
細胞動態学領域 福井研究室 博士後期課程 3 年
和田直樹 (平成 17 年卒)

私は、標記シンポジウムに大阪大学側の学生代表として参加しました。標記シンポジウムは、大阪大学と韓国科学技術院(KAIST)との間で 2 年に 1 度行われる学生主体のシンポジウムです。今年度は韓国 の KAIST で行われ、大阪大学からは教官、学生合計 15 名が参加しました。私は、日本側の取りまとめ役として、KAIST 側とのプログラムなどについての議論、日本側学生の航空券の手配、必要事項の連絡など様々な仕事をさせていただきました。準備期間の短さ、旧正月という時期の影響もあったと思いますが、なかなか思うように仕事が進まず、当日に間に合うだろうかとヒヤヒヤした事もありました。しかし、こちらが提案した、「口頭発表で自己紹介を含めた研究紹介を簡単に行い、ポスター発表で詳細に説明を行う」という発表形式が採用された時には、シンポジウムを自分たちで作っているという実感を得ることができました。当日、朝に行った計 34 題の口頭発表には多くの方々に参加していただき、それぞれ個性あふれる発表を聞くことができました。また、午後にはポスター発表を行い、朝の発表を聞いて興味をもってポスター発表を聞きにきてくれた人々とディスカッションすることができました。このような、1 対 1 に近い状況で自分の研究を英語で説明するということは、KAIST の学生との交流という点でも、またこれからの自分の人生にとっても、非常に意味のある経験だったと思います。

また、今回の KAIST 訪問にあたって、KAIST の学生の方々には非常に親切にしていただきました。様々なおいしい韓国料理に連れていっていただいたり、飲み屋でそれぞれの国のゲームで盛り上がったり、ともに深夜までカラオケで騒いだり、ショッピングを案内してもらったりと、本当に大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、旅費を支給して頂いた大学院 GP「国際連携大学院 FD ネットワークプログラム」(取組責任者 金谷茂則教授)、ならびに尚醸会(大阪大学工学部醸造・醸酵・応用生物工学科同窓会)に感謝いたします。



参加者全員と集合写真 (KAIST にて)

2009バイオテクノロジーセミナー東京報告

尚釀会関東支部幹事
江口 有(昭和 58 年卒)

復活第 4 回目となる関東地区尚釀会は、インフルエンザ騒動の渦中ではありましたが昨年より多い 52 名の参加を得て、平成 21 年 5 月 22 日に開催されました。

第一部のバイオテクノロジーセミナーでは、まず始めに母校の藤山和仁先生から植物やカイコの糖鎖についてご講演をいただきました。次いで山本哲郎さん(株式会社 TTC) (S53B, S63D) からベンチャー創業の苦しみをエピソード豊かに伺った後、阪大法学部卒の久保浩一氏(みずほ証券)から、為替相場についてグローバルな視点から解説を頂きました。いずれのご講演も興味深かったのですが、今後は久保氏のような異業種講演の企画もなかなか面白いと思いました。

その後、第二部の懇親会に移りました。原島俊先生から大学、学部、学科それぞれの話題をうかがった後、古川令さん(S53B, S55M)から、ご自身の監修で発売されている「ぐりこ・や」のお菓子のマジック実演を間近で見せていただきました。そして大政健史先生を加えた母校からの 3 名の先生を交えて歓談に花が咲きました。

今回の特徴は、世代間のバランスがとてもよく取れていたことです。社会人 1 年生から還暦組の先輩まで幅広い参加者があり、また若い世代を中心に女性同窓生の参加も目立ちました。今後もこの傾向が続くように願っています。遠く弘前からの参加もありました。同窓生とは知らずに仕事で接点のある方と思いがけず出会い、お互い驚くというのも同窓会の魅力です。

また昨年までの学士会館に代わり、今回は大阪大学東京オフィスも入居する施設、東京田町のキャンパスイノベーションセンターを会場に選びました。近代的で交通の便も良く、会場費も安いことから、これからも活用したいと思います。

次回は平成 22 年 5 月 21 日(金)に、今回と同じキャンパスイノベーションセンターで開催する予定です。多数のご参加を心待ちにしています。



写真 上 懇親会風景



右上 山本 氏



右下 藤山先生

女性研究者のキャリアデザイン

磯山(田中)純子 (平成7年卒)

私が学部4年生として研究室に配属された時、研究室は博士後期課程の先輩は少なく、しかも女性は留学生の方のみでした。他の研究室でも女性は留学生の方ばかりで、日本人の方はとても少なかったと思います。「私は博士後期課程に進学するつもりだ」と言った時に、「そういうても女の人は結婚や出産ですぐ辞めちゃうから」と言われたこともあります。

実際、以前は周りの環境も整っていなかったため、女性が結婚、出産を経て研究者として仕事を続けていくことは並大抵のことではなかったと思います。特に任期付の研究員などの場合は、出産のために仕事を辞めざるをえず、また復帰の際にも子育てとの両立が難しく、ブランクが長くなるということが多かったと思われます。

そのような時代から15年ほど経ち、大学内の様子も随分様変わりしました。以前は男子学生ばかりだった博士前期課程および後期課程でも女子学生が増え、学科内にほとんどいらっしゃらなかつたポスドクという身分も珍しくなくなりました。私も無事に博士後期課程を修了し、現在、生物工学国際交流センター、藤山研究室に特任研究員(ポスドク)として在室しております。

博士号取得後は、一度も常勤の職につくことは出来ず、長くポスドクを続けています。任期付のため将来への不安もある上、子どもを授かった場合には産休も取得できないので仕事を辞めなければいけないだろうと考えていました。

しかし、幸いにも私自身の出産時には大阪大学の制度が改正され、任期付職員でも半年間の産休、育休を取得することができました。また、子育て中の現在は、大阪大学女性研究者キャリアデザインラボによる研究支援員制度で支援研究者を雇用していただき、多大な研究支援を受けています。周りから様々なサポートを受け、研究を続けることが出来る環境に日々感謝しています。

ただ、このような恵まれた状況は、雇用してくださっている藤山先生をはじめ、周りの皆様のご理解、ご協力があつてはじめて成り立つものです。様々な法律が立法されようと、周りの人々の意識が変わらない限り実現されないということを自身の体験を通して実感しました。私のような状況がとても幸運だというのではなく、ごく一般的なことになって、これからもますます増える女性研究者が堂々と仕事を続けられるようになればいいなと思います。

～応生 Archive：教室の懐かしい物品を紹介します。

大政健史（昭和 61 年卒）

教室の地下室に設置されていた 100L のファーメンターを覚えておられる卒業生も多数いらっしゃると思います。本ファーメンターは 1970 年に 2 台設置されて以来、学生実験等、様々な培養に 36 年間利用されて参りました。一度、リニューアルを経て 1 台になりましたが、2006 年から 2007 年にかけて実施された耐震工事にて撤去されてしまいました。現在、100L ファーメンターの攪拌羽根等は、工学研究科資料室を経て、大阪大学総合博物館に寄贈されております。



撤去直前の 100L ファーメンター (2006. 12. 4)



～ 酿酒野球大会も第30回を迎えました～

大阪市立大学工学研究科 東 雅之（昭和60年卒）

昨年度の酿酒野球大会の幹事を努めました関係で野球大会の近況について報告します。過去に参加されたOBの方には少し記憶にあると思いますが、関西の生物工学関連の研究室間で1年に1回軟式野球大会を行っています。野球大会の歴史については諸先輩方がお詳しいと思います。大阪大学工学部と京都大学工学部の間で始まったのが最初で、阪大の故田口久治先生など諸先輩が活躍されたと聞きます。その後徐々にチーム数が増え、現在は11チームが参加しています。阪大からは工学部と薬学部がそれぞれ1チーム、京大は工学部が1チーム、農学部から3チーム、さらに阪市大・阪府大・奈良先端大・関学・神戸大学も参加し、試合の日程調整は極めて困難ですが、各チームの協力を得ながら運営しています。また、大会も回を重ね昨年は第30回記念大会となりました。

ガンバ大阪の練習場の隣にある万博公園スポーツ広場の軟式野球場4面を貸し切り、1日で各チームが3から4試合行い優勝を争っています。阪大工学部チームは、岡澤先生に幹事として運営にご協力頂いています。戦績も良く毎年優勝に絡んでいます。前々年度は阪大工学部チームと京大農学部応用微生物チームが同点で首位に並び、後日個別に決勝戦を行い、この時は残念ながら2位でした。昨年度の大会は9月に試合を予定していたのですが、台風の影響で一旦中止となりました。しかし、その後年内に開催を望む声が多数出され、10月末に大会を行う運びとなりました。参加チームは9チームでしたが、当日は天候にも恵まれ熱戦が繰り広げられました。結果を記しますと、優勝は京大農学部応用微生物チームで連覇となりました。以下2位京大農食品生物、3位阪市大、4位阪大薬、5位阪大工、6位奈良先端大、7位京大農生体高分子、8位阪府大、9位関学という結果でした。阪大工学部チームは5位に甘んじましたが来年度の巻き返しに期待したいと思います。例年下位に甘んじている、阪市大チームや阪大薬学部チームが上位に食い込んでいるのが今年の特徴で、群雄割拠になりつつあります。

野球大会終了後は恒例の懇親会を阪大工学部生協食堂で行っています。以前は薬学部の食堂で行っていたのですが、人数が増え食堂に入りきらず工学部の食堂で行うようになりました。野球に参加した人だけでなく応援団も加わり、昨年度は198人の熱気で生協が包み込まれました。生物工学関係者が多く集まる機会でもあり、ここ数年は日本生物工学会関西支部の支部長先生（昨年は阪府大の林先生）にもご挨拶頂いています。18時から2時間の間にビールをふんだんに飲みながら、表彰式、チームMVPの発表、その間に繰り広げられる各チームの芸を楽しみながら、チーム間の交流深めています。普段の運動不足もあり、懇親会を終えると燃え尽きます。

最後にお礼とお願いを申し上げます。本大会は、生物工学関係の研究室間の交流を深めることを目的としており、できるだけ多くの学生が懇親会に参加できるよう学生の参加費を低くしています。有職者の参加費でなんとか運営しているのが実態で、毎年阪大の先生方には多数参加頂いています。大変お忙しいとは思いますが、今後も是非ともご協力頂きますようよろしくお願ひ致します。OBの方々でもし興味ございましたら覗いて下さい。熱気あふれる元気な学生と一緒にになって楽しめます。今年は、神戸大学の主催で万博公園にて9月4日に開催される予定です。

<<同窓会通信>>

(同窓生便り)

Prof. Tatsuji Seki Presented with The Honorary Doctoral Degree in Science (Biotechnology) from Mahidol University.

Prof. Watanalai Panbangred, Ph. D.

Mahidol University, Thailand

This year, Mahidol University awarded the Honorary Doctoral Degree to 9 professors in the fields of Nursing (1), Medicine (2), Dentistry (1), Medical Technology (1), Pharmacy (1), Science (2) and Sports Science (1). Among the nine awardees, six were Thai and three were Japanese professors.

The Faculty of Science, Mahidol University recognized the great contributions of Prof. Seki and Professor Visut Baimai, Ph. D., Professor Emeritus from the Department of Biology, to the research and education of the Faculty, and therefore nominated both of them for The Honorary Doctoral Degree in Science, which received approval from the Senate Council of Mahidol University on March 18, 2009. Prof. Seki received The Honorary Doctoral Degree in Science in the field of Biotechnology.



Left: Professor Emeritus Tatsuji Seki, Ph. D., the director of the Osaka University, Bangkok Center for Education and Research, Thailand, has received The Honorary Doctoral Degree in Science (Biotechnology) from Mahidol University.

Right: Prof. Seki together with other awardees and University alumni attended the graduation ceremony and received the degree from Her Royal Highness, Princess Maha Chakri Sirindhorn at the Royal Thai Navy Convention Center on July 6, 2009.

(同窓会活動報告)

○ お酔の力に魅せられて ミツカン阪大会

株式会社ミツカン 和田悠 (平成 16 年卒)

ミツカンでは、毎年大阪大学の出身者で阪大会を開催して、親交を深めております。本年は、平成21年6月5日(金)、新入社員2名の歓迎会を兼ねた同窓会を開催しました。

ここ数年は毎年20名近い参加者のもと、年に一度のお楽しみ・近況報告の場となっています。今年は例年より多くの発酵出身の卒業生が入社し、一層、活気溢れる会となりました。愛知県の知多半島の鮮魚が楽しめる本社の近くの老舗の一室を貸し切って集まることとなりました。恒例の「お酔」での乾杯は今年は行いませんでした。お酒は進むは、箸は進むは、会話は進むはで、幹事さんの息つく暇もありませんでした。

新入社員には自己紹介と合わせて大学での思い出を語ってもらいました。みんなかなり緊張しているようでしたが、先輩からのあれやこれやの質問に答えるうちに、徐々に緊張もほぐれていったようでした。

先輩社員には近況報告をしていただきました。日ごろは部署が全く異なり、関わりはあまりない方とも、いい交流の場になりました。

宴の最後には今年で定年退職されます東出敏男さん(s48卒)からありがたいお言葉を頂戴し、記念撮影を終えて、「楽しいひと時の続きをまた来年」を合言葉に、宴は無事終わりました。

この記事をお読みいただき、ミツカンに興味を持ってくださった、学生の皆様一緒に仕事をしましょう。

(文責 和田 悠)



同窓生からのメッセージ（平成 20 年度に寄せられた分）

三宅正夫 昭和 18 年卒

細々ながら今も現役で仕事をやっています。主に外国人相手の仕事ですが。

卒業時幸い海軍技術科に入隊できたので海軍の連中と親しくしています。

毎年のビールの会には出来るだけ参加させて頂こうと思います。

（クラス会は出席者も少なくなり、幹事氏も大変なので、中断中。再開見込殆どゼロも致方ありません）

貴会の益々のご発展を祈る。会報多謝

島下昌夫 昭和 31 年卒

尚釀会会報御送付頂き有難うございました。

5 年程前に脳内出血で左半身不隨で歩行不能になりリハビリに努めていますが未だに外出不可能で今年も欠席させてください。申し訳ありません。

マスコミ（新聞やテレビ）のバイオ・バイオと言う論調を見ると若い者（孫達）に可能性は高いけれど all mighty じゃないよと解説・説教してウルサガラレテいます。

御参会の皆々様の益々の御健康と御発展を祈ります。

大畠浩平 昭和 37 年卒

相変わらず 13 年來の不整脈に悩まされています。

野本哲也 昭和 34 年卒

今回は既に他の予定が入っていて出席できません。ますます元気にやっています。

三崎 旭 昭和 27 年卒

卒業して半世紀の間に社会環境も変動しました。久しぶりの同窓会、諸兄とおあいするのを楽しみにしています。

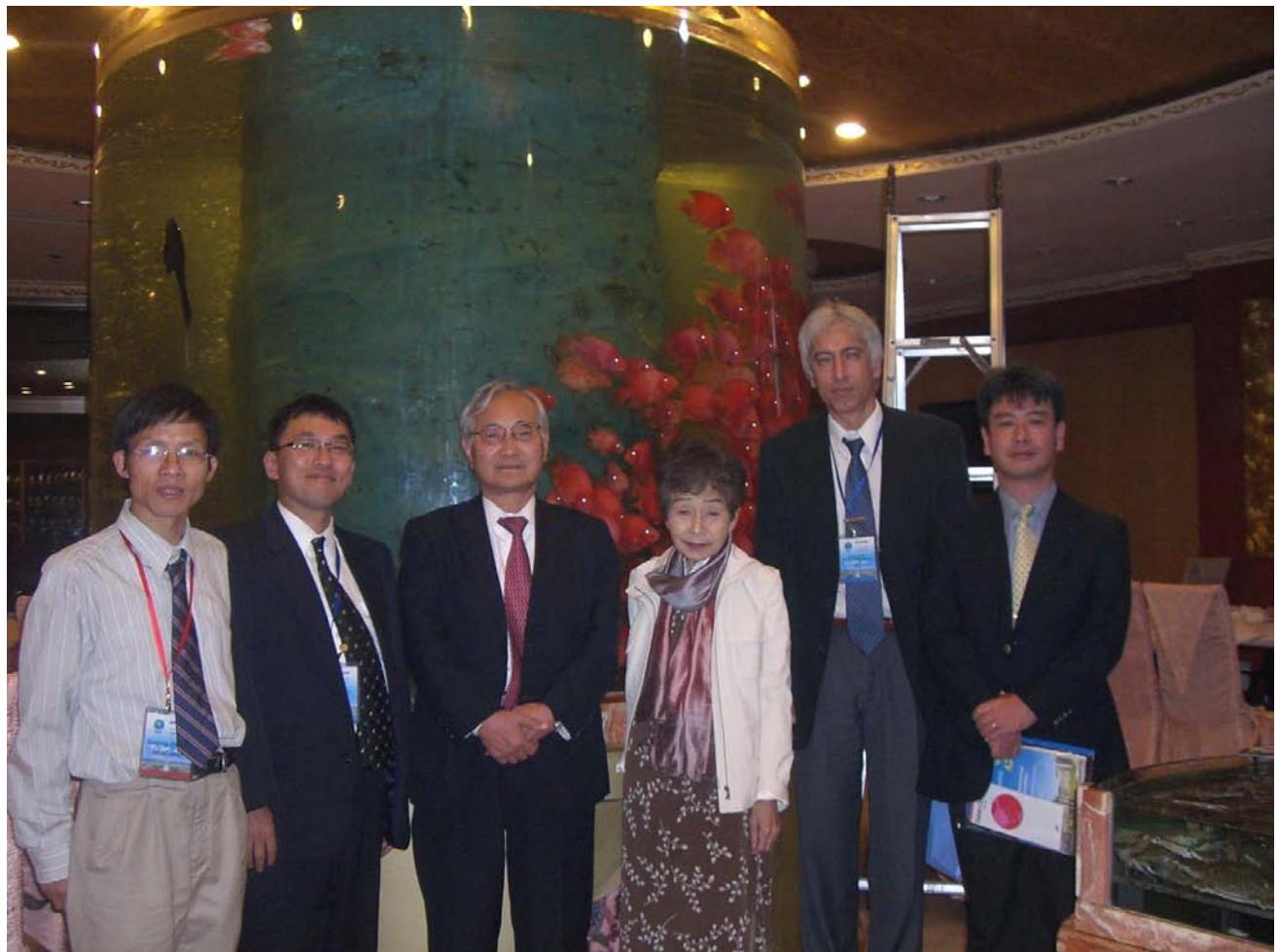
永井史郎 昭和 30 年卒

姫路食品技術研究会のお世話をしています。伝統食品の機能性評価、食品産業副産物の資源化など課題です。元気にやっています。

大政 健史 昭和61年卒

昨年の秋(2008年10月)にIBS2008 (International Biotechnology Symposium 2008)が中国大連にて開催されました。大連の地は旧満鉄中央研究所があったところでもあり、本教室にも関連深いところです。IBSはIUPAC傘下のBiotechnology Committeeにて開催される4年に一回の会議であり、国際発酵会議にそのルーツがあります。今回の参加者は約3000人にもなる大規模な学会でした。

本教室関連でも卒業生のJian-Jiang Zhong教授が実行副委員長を務められた他、keynoteに大竹久夫教授、Konstantin Konstantinov博士、招待講演に塩谷捨明名誉教授、Jian-Jiang Zhong教授、小生も含め多数の方々が参加されておりました。



写真左より

Jian-Jiang Zhong(鐘建江)教授(上海交通大学、平成2年M卒)、小生、吉田敏臣名誉教授、沢住文子さん、Konstantin Konstantinov博士(米国Genzyme社副社長、平成3年D卒)、清水浩教授

編集部より

会費振込用紙や同窓会参加申し込み用紙にメッセージをお寄せください。来年の会報に掲載させていただきます。

平成 20 年度 同窓会会計報告

| | | |
|-----|-----------------------|-------------|
| 収 入 | 平成 19 年度より繰越金 | 3,240,892 円 |
| | 平成 20 年度会費 | 536,625 円 |
| | 同窓会パーティ会費 | 264,000 円 |
| | 受取利子（税引き後） | 2,567 円 |
| | 合 計 | 4,044,084 円 |
| 支 出 | 同窓会会誌印刷費（アルバイト代金含む） | 238,041 円 |
| | 郵送通信費（交通費含む） | 179,659 円 |
| | 名簿管理費 | 40,000 円 |
| | 同窓会パーティ運営費（アルバイト代金含む） | 360,005 円 |
| | 寄贈（メモリアルホール時計） | 46,070 円 |
| | 学部 2 年生懇談会補助金 | 100,000 円 |
| | 合 計 | 963,775 円 |
| 収 支 | （平成 21 年度への繰越金） | 3,080,309 円 |

平成 20 年度 学生国際活動支援基金会計報告

| | | |
|-----|-----------------|-------------|
| 収 入 | 平成 19 年度より繰越金 | 4,327,672 円 |
| | 受取利子（税引き後） | 3,646 円 |
| | 合 計 | 4,331,318 円 |
| 支 出 | KAIST-OU 交流会補助金 | 10,000 円 |
| | 支出合計 | 10,000 円 |
| 収 支 | （平成 21 年度への繰越金） | 4,321,318 円 |

証 明 書

平成 20 年度大阪大学工学部醸造醸酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収証、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の（収入・支出内訳、預金通帳）を監査したところ、正確妥当であることを証明します。

平成 21 年 4 月 22 日

大阪大学工学部醸造醸酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）

会計監査人

※Web 版のため印章部分を削除いたしました。

大阪大学工学部 酿造・醸酵・応用生物工学同窓会「尚醸会」会則

1. (名称)

本会は大阪大学工学部 酿造・醸酵・応用生物工学同窓会「尚醸会」と称する。

2. (会員の構成)

本会は次の会員で構成する。

(1) 正会員

イ 大阪大学応用自然学科応用生物工学コース、同大学大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学コース（以下教室と言う）およびそれらの前身学科、専攻の出身者。

ロ 上記イの教室および付則に示す関連講座の旧教官・教員、現教員および現職員。

ハ 上記イの教室および付則に示す関連講座に關係のあるもの（旧職員、研究生、実習生など）で、入会を希望し会長が承認したもの。

(2) 名誉会員

会員の中から幹事会の推薦により総会の承認を得たもの。

(3) 賛助会員

本会の趣旨の賛同し、付則に定める会費を納めるもので幹事会の推薦により総会の承認を得たもの。

(4) 学生会員

大阪大学工学部応用自然学科応用生物工学コースおよび同大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学コースに所属する学生。

3. (目的)

本会は会員相互の親睦を図り教室の発展に寄与することを目的とする。

4. (所在地)

本会の事務所は教室内に置き、会員の希望により支部を設けることができる。

5. (役員)

本会には次の役員を置く。

(1) 会長 1名 正会員の中から総会で選出する。

(2) 副会長 2名 正会員の中から会長が推薦し、総会で承認する。

(3) 幹事長 1名 正会員の中から会長が委嘱する。

(4) 幹事 若干名 正会員の中から会長が委嘱する。

(5) 監査 2名 正会員の中から総会で選出する。

（注）常任幹事を削除。

6. (役員の任務)

本会役員は、役員会を構成し、本会の運営を図る。役員の任務は次のとおりである。

(1) 会長は本会を総理する。

(2) 副会長は会長を補佐する。

(3) 幹事長は幹事を総括して会務を掌理する。

(4) 幹事は庶務、財務、企画、編集の事務を行う。

(5) 監査は本会の運営と会計を監査し、総会に報告する。

（注）常任幹事の任務を削除。

7. (役員の任期)

役員の任期は2年とし再任を妨げない。

8. (名誉会長)

(1) 本会に、名誉会長をおくことができる。

(2) 名誉会長は幹事会が推薦し、総会の承認を得て委嘱する。

9. (会議)

(1) 本会は原則として2年に1回総会を開き、役員の改選、会計報告、会則の改正、その他重要な事項を議する。

(2) 総会の議決には出席正会員の過半数の賛成を必要とする。

10. (会計)

- (1) 本会運営の経費は会費およびその他の収入を持ってあてる。
- (2) 会費は付則に定める金額とする。
- (3) 名誉会員および学生会員からは徴収しない。また、卒業後50年以上の会員は会費を免除する。
- (4) 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

10. (会則の変更)

本会の会則は総会において出席正会員の三分の二以上の賛成を得て改正することができる。ただし、書面を持って賛否を表す場合は出席とみなす。

付則

大阪大学応用自然学科応用生物工学コース・同大学大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学コースの関連講座とは、大阪大学生物工学国際交流センター、同大学工学研究科物質・生命工学専攻極限生命工学講座、同大学産業科学研究所生体応答科学研究部門高次細胞機能部門、同大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻代謝情報工学講座、同大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻生物共生情報工学講座およびその前身をさす。

本則第9条の会費は次のとおりとする。

- (1) 会費 正会員は年額 2,000円、賛助会員は年額 1口 5,000円。
(注) 入会金は削除

本則第4条の規定に従い、本会に関東支部を置く。

付則の変更は役員会の議をもって行う。

5. 本会則は平成8年11月15日から施行する。

平成18年11月11日改訂

☆同窓会現組織

会長 大嶋泰治

副会長 菅 健一、中桐義隆

幹事長 原島 俊

常任幹事 大竹久夫、片倉啓雄（庶務担当）、藤山和仁（編集担当）、
大政健史（名簿担当）、四方哲也（財務担当）、松浦友亮（庶務担当）、東 雅之、向 由起
夫、松村 吉信、永尾 寿浩（企画担当）、古賀雄一（編集担当）、

監査 永井史郎、柴谷武爾

これまで尚釀会の幹事会は、生命先端工学専攻（旧応用生物）の先生方で運営しておりましたが、同窓会をより活性化するために、近畿圏でご活躍の以下の卒業生の方々に幹事をお引き受けいただきました。新常任幹事には、企画担当をお願いし、同窓会の活性化のための企画と同窓会誌の内容の充実を図っていただきます。

東 雅之（昭和 60 年卒） 大阪市立大学 工学研究科 化学生物系専攻 教授

向 由起夫（昭和 63 年卒） 長浜バイオ大学 バイオサイエンス学科 准教授

松村 吉信（昭和 63 年卒） 関西大学 化学生命工学部 准教授

永尾 寿浩（平成元年卒） 大阪市立工業研究所 生物・生活材料研究部

☆会員の動向

（最近の動向がございましたなら、同窓会までご一報下さい。）

同窓会からのお願い

近年、企業合併や部署移動、市町村合併によって住所変更、所属変更となる方が増えております。自宅住所、勤務先住所等に変更のある場合には同窓会までぜひご連絡いただけましたら幸いです。お寄せ頂いた個人情報は同窓会誌発送以外には利用いたしません。

☆クラス会幹事（クラス会幹事の方には会員の所属の移動等について同窓会への連絡をお願いいたします）

| | | | | | |
|-----------------|-------|---------|------|---------|-------|
| 昭和 12 年 | | 昭和 40 年 | 新名惇彦 | 昭和 63 年 | 向 由起夫 |
| 昭和 15 年 | 石井隆一郎 | 昭和 41 年 | 関 達治 | 平成元年 | 永尾寿浩 |
| 昭和 16 年 | 武田六郎 | 昭和 42 年 | 卜部 格 | 平成 2 年 | 松本雄大 |
| 昭和 18 年 | 芝崎 熱 | 昭和 43 年 | 関口順一 | 平成 3 年 | 鈴木市郎 |
| 昭和 19 年 | 松本 博 | 昭和 44 年 | 土戸哲明 | 平成 4 年 | 内山圭司 |
| 昭和 21 年 | | 昭和 45 年 | 古川憲治 | 平成 5 年 | 滝口 昇 |
| 昭和 23 年 | 佐藤 勝 | 昭和 46 年 | 山本忠行 | 平成 6 年 | 松浦友亮 |
| 昭和 24 年 | 野口祐一 | 昭和 47 年 | 島田裕司 | 平成 7 年 | 永久圭介 |
| 昭和 25 年 | 足立有 | 昭和 48 年 | 曾根良昭 | 平成 8 年 | 金谷 忠 |
| 昭和 26 年 | 辻坂好夫 | 昭和 49 年 | 小西喜朗 | 平成 9 年 | 小林 肇 |
| 昭和 27 年 | 松中昭一 | 昭和 50 年 | 中塚正博 | 平成 10 年 | 田中礼央 |
| 昭和 28 年 (旧制) | | 〃 | 東浦忠司 | 平成 11 年 | 永塚由佳 |
| 昭和 28 年 (新制) | 高野光男 | 昭和 51 年 | 溝口晴彦 | 平成 12 年 | 井戸芳博 |
| 昭和 29 年 | 嶋谷幸雄 | 昭和 52 年 | 根来誠司 | 平成 13 年 | 後藤優治 |
| 昭和 30 年 | 大嶋泰治 | 昭和 53 年 | 金子嘉信 | 平成 14 年 | 有岡伸悟 |
| 昭和 31 年 | 遠藤靖夫 | 昭和 54 年 | 高木 瞳 | 平成 15 年 | 新家康弘 |
| 昭和 32 年 | 細見正明 | 昭和 55 年 | 滝沢 昇 | 平成 16 年 | 和田 悠 |
| 昭和 33 年 | 中桐義隆 | 昭和 56 年 | 阿野貴司 | 平成 17 年 | 藤井健治 |
| 昭和 34 年 | 野本哲也 | 昭和 57 年 | 片倉啓雄 | 平成 18 年 | 鳳桐智治 |
| 昭和 35 年 | 森元英雄 | 昭和 58 年 | 森川正章 | 平成 19 年 | 高木康弘 |
| 昭和 36 年 | 戸田廣良 | 昭和 59 年 | 藤山和仁 | 平成 20 年 | 木村修一 |
| 昭和 37 年 | 菅 健一 | 昭和 60 年 | 中嶋幹男 | 平成 21 年 | 外尾竜太 |
| 昭和 38 年 | 吉田敏臣 | 昭和 61 年 | 大政健史 | | |
| 昭和 39 年 | 藤田正憲 | 昭和 62 年 | 山本恵三 | | |

* クラス幹事が空欄の学年は、その学年でご相談の上、同窓会事務局までお知らせください。

会員各位

拝啓、ますますご清祥のことと拝察します。
さて、下記記載の要領で平成21年度会費の納入をお願い申し上げます。

記

1) 郵便振替にて納入される場合

同封の払込通知票を用いて、最寄の郵便局にてお振込下さい。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醸酵応生同窓会

金額：2,000円

2) 郵便貯金口座自動払込を申し込みされる場合

最寄郵便局で自動払込利用申込書に必要事項を記入の上、お
申し込み下さい。今後、毎年11月30日に貴口座より、年会費
2,000円を自動引き落としさせていただきます。手続きの都合
上10月15日までにお願い申し上げます。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醸酵応生同窓会

払込開始月：平成21年11月から

払込日：30日

払込の種別：会費

(注：昨年度すでに自動払込申込をされた方は新たな手続きは不要です。)

♪♪♪♪♪♪♪ 同窓生のみなさまへ会費免除のお知らせ ♪♪♪♪♪♪♪

いつも会費納入にご協力いただきまして誠に有り難う御座います。

同窓生のみなさまは卒業後50年経過しますと会費免除となります。

平成21年度は昭和34年卒の同窓生が該当致します。会誌送付や諸行事への参加などは今までと変わりありません。今年から免除になられた同窓生及びすでに免除になっておられる同窓生の皆様には、長い間会費を納入していただきまして有り難う御座いました。

今後も同窓会へのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。



大阪大学工学部 酿造・醸酵・応用生物工学科
同窓会会報 第12号
平成21年9月1日 発行
印刷所 中西印刷
発行人 同窓会幹事長 原島 俊 (昭和47年卒業)
〒565-0871
吹田市山田丘2-1
ホームページ
<http://www.bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/>
電子メール
doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp